

幻の結核特效薬(4)

ツベルクリンの臨床成績

薬学雑誌 1891年度(明治24年) 111, 112, 113号雑報欄

帝大内科教師エルウィン・ベルツは、4月上旬から入院内科結核患者10数名について実験した。1~2mgでは反応しない患者多く、日本人の抵抗力大ならざれば、輸入時に効力減少したのではないかと疑う。有効期間は3か月であるから、ドイツを出発したとき1か月経っていたらアウトである。

スクリバ教師も4月上旬以来、入院外科結核患者15名に投与。4月17日に報告した。局所の結核には有効、輸入による変化はないとする。青山教授は3月31日以来、17人に投与。らい病にも反応したと発表。佐藤教授は14人に投与、関節の結核に効アリと報告。伊勢助教授は8人、陸軍省は22人に投与した。

次の6月発行112号には、109, 111号についてドイツ政府が2月に発表したツベルクリン臨床成績が載った。内科外科1,769患者のうち治癒はわずか28人、死亡55人、不変884人である。この6月号には不思議な記事もある。4月18

日付けメディカル・レコード誌によると^{バイエルン}巴華里はツベルクリンの販売を禁止し、ボン大学はツベルクリンを廃棄したという。薬誌にはこの件に関し何のコメントもない。

一方、日本では中央衛生会から使用権を与えられた全国の医師が5月上旬から投与を始め、その様子も官報に載りはじめた。

翌7月発行の113号は、陸軍省の成績のほか、前月同様、中央衛生会が使用許可した医師の名簿、病院名、使用状況が載った。しかし明らかにトーンダウンしている。ずっと読んでいくとp743に「ツベルクリンの運命」と題する驚くべき記事があった。

「独逸帝国は普^{プロシヤ}漏生(11大学アリ)を除くのほか、大抵の連邦に於いては各大学および市立病院にてツベルクリンの使用を禁止したりとの報あり。わが帝国大学に於いてもツベルクリンを患者に注射することを中止せりと聞く。ツベルクリンは天竺鼠の外部の結核を全治せしめざるのみならず、内部の結核はウィルヒョウ博士が人において証明せし如く、却って亢進するものの如し……嗚呼ツベルクリンの運命は幾許ぞや。吾人をして其の長短を判定するに困しむるものと云ふべし」

小林 力